週刊循環経済新聞

2016年（平成28年）3月28日（月曜日）

セミナーリポート 下

レアメタル資源再生技術研究会

海外事情や最新動向

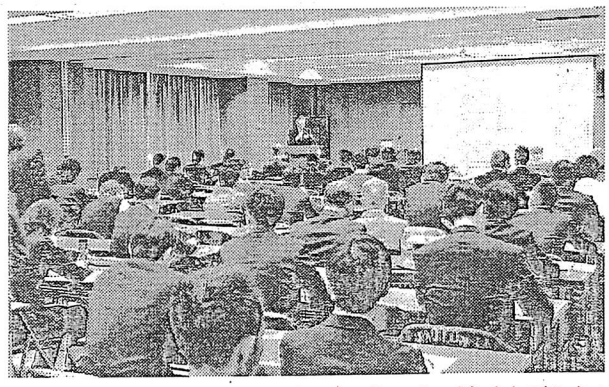
講演会で議論深める

レアメタル、レアアース（希土類）などの希少金属資源に関わる産学官の関係者でつくるレアメタル資源再生技術研究会（岐阜県各務原市、藤田豊久会長）は、3月3～4日の日程で、オープン合同分科会、講演会・交流会を開催した。2日間で延べ120人が参加し、希少金属や資源全般のリサイクルについての発表に耳を傾けた。

藤田豊久会長

オープン合同分科会に続き、3月4日に開催した講演会では、名古屋市工業研究所を会場に、「これからどうなる（どうする）資源リサイクル」をテーマとして5講演が行われた。開会のあいさつに立った藤田会長は、「鉄をはじめとして金属資源の市場は厳しい状況にあるが、経済的な問題だけでなく、環境問題としてもリサイクルは必要なこと。アジアや欧米とも協力して資源循環を図っていくことが重要だ」とした。

最初の講演では、ベトナム国ホーチミン産業大学のヴォー・ディン・ロン教授が登壇。「ベトナムにおける廃棄物処理、リサイクル、環境について」として講演した。同国では、有機系残さ1億トン、固形廃棄物2450万トンが年間に発生するという。同教授は処理の多くを陸上埋め立てに頼る同国の状況などを説明しつつ、より良い循環利用を進める必要があり、そのために技術だけでなく、社会的な廃棄物管理システムや専門的な人材の育成などでも、日本のサポートが得られれば幸いだとした。



講演会のようす

第2講では、スズトクホールディングスの鈴木孝雄氏が「資源リサイクルラーとしての取り組みと将来展望」として講演。欧米に比べて日本は、廃棄物処理・リサイクル事業者の収斂化が進んでいない現状を指摘。国内市場が飽和するなかで海外進出を考えたとき、競合する欧米の巨大企業に対抗するために、日本のリサイクル企業のメジャー化が必要との認識を示した。そのうえで、自身が率先してメジャー化を図ることで、国内業界の動きを活発化する狙いがあると話した。

第3講では経済産業省の藤井法夫氏が「レアメタルを巡る最近の動きと今後の課題」について、第4講では新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の半沢弘毅氏が「NEDOの資源循環に係る技術開発の方向性について」、それぞれ講演。政府の認識や政策の方向性などを紹介した。

最後に、産業新聞社の服部友裕氏が「Eスクラップリサイクル企業の現状in台湾」として、昨秋に同研究会が開催した「台日資源循環技術交流シンポジウム」の報告と、その際に見学した台湾リサイクル企業を紹介。電子産業が盛んな台湾におけるEスクラップリサイクルの現状を解説するとともに、処理の高付加価値化が求められている点にも触れ、日本のリサイクラーとの連携を期待していると語った。

閉会に際して研究会理事の張田真氏は「リサイクルはあくまで手段であり、私たちがどういう社会を作っていくか、という部分が問題の本質。そういったことをアジアに向け、日本が発信していく立場として、皆さんとともに考えていきたい」とした。